

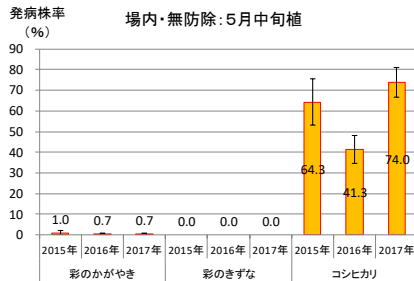
イネの「縞葉枯病」「ヒメトビウンカ」の防除対策

イネ縞葉枯病は、ヒメトビウンカが病原ウイルスを媒介するイネの重要病害です。本県が育成した抵抗性品種「彩のかがやき」「彩のきずな」は縞葉枯病に対しきわめて高い抵抗性を持ち、現在、これら2品種が広く普及しています。

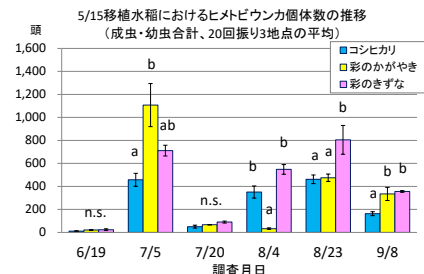
病害虫無防除栽培でも本病の多発地域において安定した栽培が可能ですが、媒介虫であるヒメトビウンカの増殖を抑制する効果はありませんので、「コシヒカリ」などの罹病性品種が混在する地域ではヒメトビウンカの適切な防除は不可欠です。被害を防ぐための防除のポイントは育苗期から移植期です。



縞葉枯病の被害株と媒介虫ヒメトビウンカ



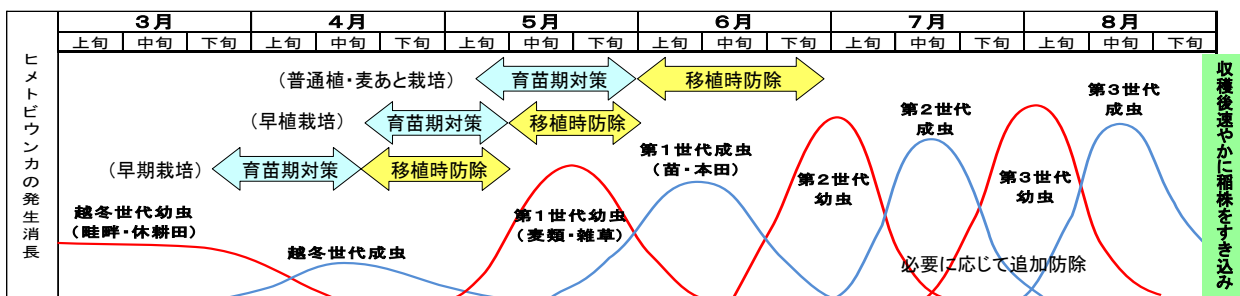
品種別の縞葉枯病発病程度



2017年のヒメトビウンカ発生消長

イネ縞葉枯病およびヒメトビウンカの防除対策

育苗期	播種・育苗時～移植時	本田期および収穫後
<ul style="list-style-type: none"> ○イネ科雑草はウンカ類の棲息場所となりますので、育苗場所周囲の除草を行います。 ○できるだけ播種時に薬剤を処理します。 ○ウンカ類の飛込みを避けるため、苗箱は寒冷紗等でトンネル状に被覆します。 ○播種時に薬剤を使用しなかった場合は、被覆を外したらただちに薬剤を処理します。 	<p>【箱施用薬剤を用いて必ず防除！】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ヒメトビウンカに対し、効果の高い箱施用薬剤として、次のようなものがあります。 <ol style="list-style-type: none"> 1. イミダクロプリド剤(アドマイヤーなど) 2. クロチアニジン剤(ワンリードなど) 3. ピメロジン剤(チェスなど) ○これらの成分を含む薬剤を用いて、播種時に育苗箱の床土に混和するか、移植前に苗箱施用します。 ○薬剤の銘柄により使用時期・使用方法・適用病害虫が異なるので必ず確認します。 	<ul style="list-style-type: none"> ○箱処理薬剤の残効は、銘柄によりますが移植後おおよそ40～60日です。その後、多発の懸念がある場合は本田防除を行います。 ○収穫後の刈株および再生株はヒメトビウンカの棲息場所になります。また、再生株での発病も広く見られます。放置すると媒介虫がウイルスを獲得する割合が高まりますので速やかに耕うんし、稲株をすき込んで枯死させます。



※これら研究成果は「農林水産業・食品産業科学技術研究推進事業27002C」により得られたものです。